戀のジャズ（八巻）

帝キネ現代映畫

原作者　桂田曉香
脚色監督者　鈴木重吉
撮影者　塚越成治

――主要配役――

赤田寫館主　淺野節
助手　牧英勝
中村潔　高津慶子
一代　八島京子
美茅子

〔略筋省略〕

物語は漁村と都會との單なる對蹠的描寫に絡んで稍々近代性を盛る爲めに、近代生活を憧れる姉娘美茅子を登場せしめ、結局、近代生活が如何に浮薄なものであるかを説明する爲めに漁村の生活を見せて、妹娘一代に其の内容を代表せしめてゐるに止まる。が併し甚だ此の物語には咀嚼し得ない兩者の對照がある。隨つて監督は凡ゆる手法を弄して其の融合を企てゝ居る。が内容のないものゝ含蓄の少ない物語は如何なる手法を用ひ樣とも咀嚼し得ないものである。鈴木監督はひどく原作を映畫的に改訂したときく、それでも此の作品は甚しく滅裂である。而も都會的雰圍氣の表現に努力して作ら、その効果が却つて漁村の自然さに奪はれてゐたと云ふ結果は、即ち監督が稍々技巧に陷り過ぎたと共に原作が甚だ皮相的な描寫のみで、都會には如何なる生活意識が働きつゝあるかを知らない點を曝露してゐる。即ち附燒刃の感じである。シルエット風のジャズバンドと、高層建築物とが短少なる存在を示す次の瞬間には、漁村にあつて妹娘が井戸端で洗濯をしてゐる等といふカッチングは觀客をして呆然たらしめるに相違ない。父親が近代生活を禮讃する氣持に於ても、姉娘が都會を夢みる過程に於ても幾多の説明を要する。助手中村と姉妹の戀愛テンポには不自然さがまぬかれない。鈴木監督カールドライエル風のカメラをかなり多く指揮してゐるが、唐突なる其の存在は何等効果を見せてゐない。少くとも物語其の物に就ても數多くの未整理箇所を發見する。監督は先づ最初にそれを整理し咀嚼すべきだつた。新聞連載物だつたと云ふ一項は此の際の監督價値には何等のハンデキャップにはならない。高津慶子の美しさと、他俳優の熱心さは大いに買ふべきだつたと思ふ。

――水町青磁――

興行價値――一部都會に於ける題名に依る良き宣傳を必要とする。地方的には物語の終末に於て可なりアピールするものを持つてゐる。

（九月一日　淺草常盤座）